第一章　管理（カンリ）と無法（ムホー）の緩衝地帯

1.

「現在駅周辺にいる、ニジュウ・ヨン・名の、二十歳未満の児童のみなさぁん。もう時刻は、午後・ロク・ジ・ですよぉ。子どもが外を出歩く時間では、ありません～。暗くなると、危ないですから、早くおうちに帰って、明日に備えて、早く寝ましょうねぇ～」

街頭のスピーカーから流れるねっとりとしたアナウンスを完全無視して、オレは駅前ロータリーで、いつものようにバスを降りた。

秋に入り始めたこの時期、この時刻にはすでに日も半ばまで沈み、辺りの店々は早くもネオンを点け始めている。魑魅魍魎の蠢き出す時刻だ。肌寒さにダッフルコートの前を手で押さえたオレは、揚々と商店街へ向けて歩き出す。目的はいつもと同じ、美少女ゲーム、アニソンＣＤ、マンガ、雑誌その他心躍らせる何かである。

県庁所在地である以外これといって際だった特徴のないウチの街には、なぜかは知らないが本家アキバに負けず劣らず「その手」の専門店がずらりと勢揃いしている。あちらを見ればアニメショップ、こちらを見れば同人誌販売店、駅前でティッシュを配るのは皆メイドさんであり、店頭からアニメキャラのポップや声優の甘い嬌声が消える日はない。特殊な喫茶店は続々とオープンし、大作ゲームの発売日ともなると、徹夜組の長蛇の列がそこかしこに現れる。そのあらぬ方向への発展ぶりに、近頃ではテレビや雑誌なんかの取材も少なくない。まあオレとしては大歓迎だが。オタク文化ばんざい。

――しかし。

それだけに、監視の眼も厳しい。

オレは、道脇の電信柱に取り付けられている監視カメラを見上げた。小型で高性能、あえて目立つように作られた、キラリと輝く銀色の眼。オレが動くのに合わせて、それはゆっくりと左右に首を振っていた。

こいつらは、子ども用の衣服に縫い込まれたペアレンタル・コントロールチップを感知して、どこまでも子どもを追い続けてくるのだ。屋内、屋

外を問わず街中の至る所に隈無(くまな)く設置されていて、オレたち児童を年中無休で見守ってくださっている。

次の角をちらりと見ると、真っ青にペイントされたミニパトがどすんと不機嫌そうに鎮座していた。中では、この世の全てがつまらないと言わんばかりの顔をした角縁メガネのオバサンが二人、周囲に鋭く眼を光らせている。ＰＴＡ直属の、児童保護員である。上から下まで真っ白な制服を着用したこの保護員さんたちは、子どもたちを万万が一の窮地から救うため、日夜頑張って三十メートルおきくらいのスパンでオレたちを監視してくださっているのである。実にありがたい話である。

実に――息が詰まる。

舌を出したオレは、そのまま逃げ込むようにして商店街のアーケードの中へ入った。たちまち、賑やかなアニソンやゲームの目映い店頭デモが出迎えてくれる。

すると、すぐそこの電器店の店先にまた別の保護員がいるのに気づいた。見た目はさっきのヤツとまるっきり同じ。店員を捕まえて、何やらヒステリックに詰問している。

「このような猥褻(ワイセツ)な図画を店先に置いておくというのは公序良俗(コージョリョーゾク)に反するのではありませんか!?」

そう言いつつ彼女は、店頭に置かれた美少女ゲームの販促用ポップをコツコツコツコツ神経質に叩いている。意志の弱そうな困り顔の店員は、首を傾げながらボソボソと応えた。

「猥褻といいましてもその、アニメのキャラですし、それに、水着姿ですから……」

「だからなんだというのです。これでは肌の露出が多・す・ぎ・る・でしょう、ね!?　アニメだろうと何だろうと、人間を描写した図画には公共の場での露出量に基準があることはご存じのはずです。コドモたちの眼に毒です！　今すぐ撤去してください。今すぐに！」

うぁーイヤだイヤだ。オレは耳を塞ぎ、先を急いだ。

このように、児童保護員には「子どもたちに害を与えると思われるもの」を発見・駆除するという重要な仕事もあるのだ。保護員たちの勧進元である全国ＰＴＡ連絡協議会（全Ｐ(ピ)連）の組織は国中に網の目のように張り巡

らされており、各地の教育委員会、さらにはその上に位置する教育省とも綿密な繋がりを持っている。これに喧嘩を売ると、下手をすれば官憲警察をも敵に回すことになりかねない。だから保護員に問題点を指摘された店は、確実に言われるままにするのである。見てみれば、さっきの店もいそいそと再来週発売予定の『アダージオ～忘れられた旋律～』のキャラポップを撤去していた。

そして反抗すれば行政処分を免れないと分かっているので店側もビビってしまい、ケチをつけられかねないものは普通、初めから店先に置かない。通常、雑誌表紙のグラビア写真さえもアウトになるのだ。だから今の指導も、この商店街ぐらいでしか見られない珍しい光景である。よそではすでに指導の余地もないほど浄化されているのだ。

ま、これも、憲法に書いてあるんだから。仕方ないんだろう。たぶん。

……はぁ。

そうこうしているうち、オレは馴染みのアニメショップへと辿り着いた。

【れっつ☆おーくしょん！　一年二ヶ月ぶり新刊発売中♪　ほら、とっとと買いなさい！】

手書きのポップにおおっと思ったオレは、すぐさまワゴンに駆け寄った。見れば、作者死亡説も流れた人気ライトノベルの新作が店先で平積みになっている。前巻の内容は完全に忘却の彼方だが、表紙で張り切った笑顔で胸を張るゴスロリファッションのヒロインを無視することも出来ず、購入確定。

その脇には、買いそびれていた『邪神降臨』のコミック第八巻が山積みになっている。五巻を買い逃した後で間違えて六巻を買って読んだら登場人物の半数が死に絶えていたので頭が痛くなり、しばらく読む気が失せていた。けれど近々アニメになるという噂なので頑張ってみるか、と思い、五巻七巻八巻を手に取る。

片手で持ちきれないくらいの冊数になってきたここらでいつも通り、幸福感と共に次第にテンションが上がってくる。そして意味もなく胸がときめく。これぞオタの喜び。

さらに店の奥から、オレと大して年の変わらないアイドル声優があどけない口調で電波な歌詞のアニメＯＰを歌っているのが聞こえてきた。無

思考状態のオレはふらふらそちらへ歩み寄っていく。ＣＤなんか買う予定はまるっきりなかったが、もはやそれは些末な問題。出費が想定の範囲を大きく超えた辺りで、この幸福感は絶頂になってくるのである。

しかし……そこで突然とんとんと、背後から優しく肩を叩かれた。

「ちょっとそこのあなた。よろしーい？」

鼻にかかったザマス上品ヴォイスに激しいめまいを感じ、絶望して目を瞑ったオレは、のっそりと振り返った。

思った通り、そこにいたのはさっき店員に突っかかっていた、あの児童保護員だった。せっかく盛り上がっていたテンションが、素晴らしい勢いで下がっていく。

ちょっとこっちいらっしゃぁい、と彼女に手を引かれるまま、脱力状態のオレは無抵抗で店の外へと連行される。あまりの面倒くささで何も言う気が起きないオレに気づいてないのか無視しているのか、典雅な手つきでタッチペンと端末を取り出したオバハンは、上から目線でこう尋ねてきた。

「さ。お名前と、年齢は？」

「……神志那愛（かみしなあい）。十四歳」

「学校は？」

「私立美園（みその）学園中学」

「あら、いいとこ行ってるじゃない。児童登録番号（ジドートーロクバンゴー）は」

「ＨＳ―１７４３９２７Ｊ」

オレは言い飽きたその番号をそらで伝える。ケーキに飾り付けするパティシエのような指使いでのんびりタッチパネルを叩く保護員は、むっつり顔のオレに向かって愛情たっぷりにこうおっしゃった。

「あのね、お嬢ちゃん、愛ちゃんね。そんなイヤな顔しなーいの。せっかくの綺麗なお顔が台無しよ。私もねー、意地悪したくてこういうことしてるんじゃないのよ」

イラ。

「あなたのためを思ってやってるの。あなたみたいに可愛い女の子が、それもまだ中学生の子が、こんな時間にこんな場所にいるとね、ヘンな男の人が寄ってくるのよ。何があるか分からないの。い～い？」

イライラ。

「万一のことがあったら、お父様もお母様も、とっても悲しまれるわ。だから今からちょっとね、学校と、ご両親に連絡して……」
イライライラ。
「オレは……」
「ん？」
プッツン。

「オレは……オレは男だぁあああああああ！」

ガマンの限界に達したオレはそう絶叫する。周囲の人がいっせいに振り向き、オレたちを見て何事かと目を見張る。
しどろもどろになった保護員は、ああアラまあホントそのねえあのごめんなさいねぇ、などと意味不明の弁解を呟きながら、慌ててどこぞへと退散していった。フン、とオレは息をつく。
それを言うのはお前で百万人目。
ほんっっっっっとうに、ウンザリ。
オレは男だ。まごう事なき男性だ。たとえ名前が少女趣味していようと、クラスの女子から愛ちゃんないしあいちーと呼ばれてバカにされていようと、初対面の人に１００％女と見誤られようと、身長がやや低めで色白でしかも声変わりしたのにソプラノのままであろうと、髪が少々長くてそこらの女子よりサラサラであろうと、いつまで経ってもニキビの一つも出来ず体格もチャイドルのようにすらりとしたままゴツくなる気配すら見えなかろうと、一生懸命男らしい服を着てもまったくもって似合わないもんだから仕方なしにフェミニンなファッションを選んでいようと、男子トイレに入るとほぼ必ず間違ってますよと赤面＆小声で忠告されようと、温泉で男湯に入るたびに場内騒然となって追い出されそうになろうと、幾度となく電車でチカンに遭っていようと、最近ではクラスの男子からも微妙な視線で見られ若干の不安を感じていようと。
オ・レ・は・お・と・こ・だ！
……はぁ。
疲れた。

いつの間にやら周囲に人だかりが出来ていて、オレをチラチラと見ては何かを話していた。内容を想像するだに憂鬱になり、持っていた本数冊を店に戻すと、オレは早々にその場を立ち去った。ラノベは別のところで買えばいい。

名は体を表すと耳が腐るほどに言われたが、変わり者の親が付けた因果な名前のせいか小さい頃から女子とばかり遊んでいたせいか、それとも妹が欲しかったという姉に弄ばれ続けたせいなのか、こんな目も当てられない姿になってしまった。呪いでも掛けられたのかも知れない。喉仏すら出てこないのだからもうホントに信じられない。生まれながらにして終身刑を喰らっているようなものだ。女の子みたいな美少年、じゃない。誰が見ても女の子にしか見えないのだから。彼女なんか未来永劫出来やしない。

急激にやるせない気持ちに襲われたオレは、周囲の視線を避けるためにコートのフードをすっぽりと被って、保護員の目を免れられる奥地の店へと緩慢に歩んでいった。

その瞬間。

「**……ぅぅぅうううううううウウウウウウウ！**」

飛び上がるほど大きな音で、どこからかサイレンが鳴った。

音に合わせて電柱上の赤ランプが激しく回転する。騒然とする商店街へ群れを成して突如ぞろぞろと現れたのは、保護員と警官たちである。彼らは一斉に、同じ一カ所へ向けて突撃する。その先には、ひと組の高校生らしいカップルが立っていた。

「ハァ、んだよおい、コラ！　邪魔すんなクソババア、離れろよ！」

「ちょっとやめてって～マジ触んないでよキモイって、ウザい、もぉ何コレぇ」

さっきまで手を繋いでイチャイチャベタベタしていた二人だったが、険しい表情の制服の集団に取り囲まれるやいなや、途端に抵抗を試みる。

けれど、全く意に介さない保護員によってたちまち二人とも取り押さえられてしまった。そして、保護員の中の一人が胸をずいと突き出して、二人に向かうと声高にこう宣告した。

「門（モン）・限（ゲン）・です」

その言葉と共に警官に引き渡されたのは……男子の方だった。
門限（モンゲン）システムに引っかかったのは、どうやら彼のようだ。マジかよふざけんなよ、と情けなく喚く男に、アンタほんとバカなんじゃないの、と彼女がヒステリックに怒鳴り散らしている。まあ、確実に別れるであろう。
バタバタ暴れながらも頭に黒い袋を被せられて引きずられていく男に背を向け、オレは静かに現場を後にする。二人に幸あれかし、と心の中で祈った。あと、いい気味だとも思った。

†

アホの底が知れないこの「門限（モンゲン）システム」というヤツは、国によって長年運営されている、Ｐ（ペアレンタル・コントロール）Ｃプログラムの一つである。
公営のシステムとしては最古の部類に入るだろう。戦後直後、作り出されたばかりの頃は、ご近所の方がお子さんに注意してあげましょうね、というだけのカワイイ制度だったらしいが、科学技術が進歩するにつれ、その厳重さは格段に進歩していった。現在ではＰＣチップと連動した、最も強力な管理制度に成り果てている。
まずはペアレンタル・コントロール・プログラム、略して「Ｐ．Ｃ．Ｐ．」について説明しなければならないだろう。子どもに関係する情報は全て、国のデータバンクに先の登録番号付きで常に自動的に蓄積されている。身体測定結果や病歴から、街中での行動パターン、商品の購入履歴、学校の成績、そればかりか趣味や興味の変遷から友だちづきあいの内容に至るまでこの国の子どもは監視され、数値化、データ化が可能な情報は全て、記録が保持されているのである。
ただし、ここが肝心なのだが、このデータはあくまで、保存されているだけに過ぎない。これをどのように利用し、どのように子どもを管理するかは、各親に任されているのである。そしてそうした管理プログラムの一つが、「門限システム」になる。
オレたちの着ている子供服の全てには、これらＰ．Ｃ．プログラムに利用するためのＩＣチップ、ＰＣチップが縫い込まれている。このチップには購入時に子どもの個別認識コードを登録する義務があるのだが、その際

親は、門限の時刻を設定することが出来る。
　また、町の至る所には、チップを認識するためのセンサーが設置されている。これによってオレたち子どもは常時位置情報を把握されていて、今どこに誰が何人いるかまで、各地の教育委員会（キョーイクイインカイ）によって管理・監視されているのである。その気になれば、親は子どもをいつでも簡単に呼び出すことが可能なのだ。
　さらに、門限（モンゲン）を突破している子どもをセンサーが発見すると、近くにいる児童保護員（ジドーホゴイン）や所轄の警察署へ、連絡が瞬時にまわる。同時に親や学校にも通報され、さっきのように群がる保護員（ホゴイン）たちによって捕縛された子どもは、あえなく家へと護送されることとなる。
　国内で販売されている全ての子供服にはこのチップが仕込まれており、もしデータの入っていないチップを着た子どもが歩いていると、やはり発見され捕獲されて親が叱られる。そしてもちろん全裸で歩きまわるわけにはいかず、オレの場合そんなことをしたら変態さんを掻き集めることになりかねない。従って、オレたちはこの仕組みに従わざるを得なくなる。
　もちろんこんな単純なものばかりでない。他にも、ありとあらゆる最先端のテクノロジーを駆使し、全ての領域において、この国の子どもたちは大人によってパーフェクトに監視（コンシ）・操作（トロール）・統制（ペアレンタル・コントロール）されている。これぞ、我が国が世界に誇る「児童保護福祉体系」、通称Ｐ　Ｃシステムなのである！
　某国の軍事予算並みの金銭が毎年注ぎ込まれたこのグレートでワンダフルなシステムは、かくしてオレたち子どもを家出・夜遊び・無断外泊の脅威から、日夜守り続けているのである！　スゴいのだ。スバラシイのだ。うはははははははははははは。
　……ああ。
　ただし。憲法にもあるとおり、これはあくまでも大人に認められた権利であって、強制性はない。例えば、門限（モンゲン）を設定する義務は、どこにもないのだ。うちの親などもその辺奔放なのでオレに門限（モンゲン）はなく、帰りが遅くなっても少々怒られるくらいで済む。けれど、厳格な家では門限（モンゲン）ばかりでなく、同じシステムを使って行動範囲まで制限してしまうこともままあるというから恐ろしい。

これもみんな、子どものためだそうだ。
全ての政治思想が瓦解した現代において生き残る、最後にして最大の体制。
それが、親。

†

せっかくみなぎっていたやる気とオタパワーもどこかへ消し飛び、買う物だけ買ってとっとと帰りたくなってきた。さっきとは別の手近な店に入り、目を付けた四冊とCDを手早く確保してレジに並ぶ。
そうして、呪いでも掛けられたようにのっそりレジを打つバイト店員をぼんやり待っているときだった。オレはふと、店の外からの妙な視線に気づき、眉を顰(ひそ)めた。
「……なんだアイツ？」
ウィンドウの向こうからこちらを覗き込んでいたのは、この商店街にまったく不釣り合いな、やたらと硬派なファッションの不良だった。
百九十近いであろう長身にワックスでがっちり固めた黒髪、頬骨の張りだした痩せぎすの顔はサングラスではっきりしないが、鼻梁は高く通り、両耳にはピアスをしている。シルバーアクセに革ジャケット、輸入盤でしかお目にかかれない欧米のロックスターのようだった。そんなのがグラサン越しにジロジロと、どうやらオレを見ている。マズいと思ったオレは、咄嗟に目を逸らした。
そういえば以前、軟弱かつ金だけは持ち歩いているオタクを狙ったカツアゲが横行しているという話を聞いたことがある。危険だ。その上もしかしたら、オレのことをただの美少女だと勘違いしている可能性もある。ますます危険だ。なんにせよ、猛烈に心細くなってきた。
商品を受け取ったオレは、素早く店を出た。すると案の定、不良はオレの後について歩き出した。オレは大急ぎでバスターミナルへと歩を進める。
こちらはほとんど走るような速度で脇目もふらず歩いているのだが、いかんせん脚のリーチが違う。オレが五歩で行く距離を二歩ぐらいでついてくるのだから、あっという間に差を詰められていく。影を見ると、ヤツは

確実に迫ってきていた。明らかにターゲットはオレである。カーブミラーをちらりと見れば、完全にマフィアの形相で不良はオレを追ってきていた。怖い。

周囲を見回すが、思った通り頼れそうな人間は誰一人いない。追われるオレに気づいても、みんな明らかに眼を逸らしている。フィギュアを店から救い出している暇があったら美少女（みたいなオレ）を助けて欲しい。しかし不思議なもので保護員さん方も、こういう本格派のトラブルは視界に入らないらしい。

仕方がない。

オレは深呼吸すると、そのまま振り返ることなく全速力で駆け出した。

2.

何とかかんとか無事家までたどり着いたのは、すでに夜八時前だった。正直もうダメかと何度も思ったが、辛うじてバスに乗り込むところでヤツを振り切ることが出来た。ああいう人たちは頼むから自分の領土（スラム街とか）で静かに余生を過ごして欲しいと思う。

そうして、オレが家のドアをのっそりと開けると、そこには仁王立ちの母親が待ちかまえていた。母さんは重々しく口を開く。

「遅い。双葉（ふたば）ちゃんが待ってるよ」

「へ？　なんで？」

急な話にぽかんとするオレをほったらかして、母さんは例によって滔々と説教を始める。

「なんで、も何もないでしょう。女の子待たせて、まーたあの商店街行ってたの？　全く、あんな変なところに入り浸ってみっともない。しかもこんな時間まで。何時だと思ってるの。もし何かあったらどうするの？　一番悲しむのは双葉ちゃんでしょう。危ない眼に遭わないためにも、今後は暗くなる前には必ず家に、って、ちょっと、愛！　待ちなさい！」

そんな母親の言葉をあーあー言いながら聞き流したオレは、その脇を通り抜け、急いで階段を上ると、二階の自室へと駆け込んだ。

オレがそっとドアを開けると、部屋の中では本当に双葉が床にぺたんと

座って、一人マンガを読んでいた。入ってきたオレに気づいた双葉は、顔を上げる。
『あ、愛くん、お帰り。遅かったね』
『ああ……うん。どしたの？　何でいるの？』
『何でって、ちゃんとメールしたよ。見てないの？』
　双葉はそう言って、首を傾げた。携帯を取り出してみると、確かに「遊びに行く」という双葉からのメールが届いている。あのパンクロッカーからの決死の逃亡劇に忙しくて気づいていなかったのだ。
　オレが謝ると、双葉は大して気にしていない様子で、いつもの人なつこいフンワリした笑みを浮かべた。そして尋ねてくる。
『また今日もいつものところ行ってたの？』
『え、うん、まあそう、だね。その、別にそんな常連っていうわけじゃなくて、気づいたら行ってしまうというか……』
『じゃあ、またこういうの買いに行ってたの？』
　そう言って双葉が示すさっきまで読んでいたマンガは、見れば登場人物の九割五分が女子で、生活に支障を来すほどの胸部を持つ上に、露出趣味があるとしか思えないハレンチな服を着用なさっているような類のアレだった。オレは飛びかかるようにそのマンガを没収すると、本棚の奥の奥へ戻し、それから双葉に説教した。
『本棚の奥の奥の方にしまってあるような本は、決して取り出しちゃいけません。オレが心に傷を負うから。あと、今日買ってきたのはああいうのじゃない。断じて』
『じゃあ見せて』
『イヤだ』
　魅惑のアニソンＣＤは何としても隠し通さねばならない。
　すると、不服げに双葉が話しかけてくる。
『じゃあどれなら読んでいいの？　このマンガ？　こっち？　それともこの小説？』
　どれもこれも部屋にあるものは全体的にダメだ。双葉は口を尖らせる。
『ゲームもしちゃダメって言うし、アニメの録画も観ちゃダメって言うし、パソコンはパスワードかかってるし』

『パソコンいじったの!?』
『だっていつまで経っても帰ってこないんだもん。愛くんのことだからマンガのタイトルとかキャラクターの名前とかがパスワードかと思って、本棚に並んでるマンガ色々読んでたんだけど……でも、結構面白かったよ、さっきの。今度貸して』
思考が読まれている。オレは天を仰ぎ、パスワード変えようと決めた。全身全霊を傾けてDドライヴは死守せねばならない。あんなもん見られて双葉に嫌われたら人生おしまいだ。オレは双葉の方へ向き直ると、手話でこう言った。
『この部屋に入ったら、二つのルールを守るように。①一切何にも触れない、②見たもののことは全て忘れる。いいな？』

†

この娘、御子元（みこもと）双葉は「近所に住む同い年の幼なじみの女の子」である。
これ以上何の説明が必要だろうか。伝家の宝刀。勝ち組宣言。全人類羨望の萌え要素。たとえ他の男が「拾ってきた子猫が美少女に化けました」とか「家にはメイドさんがいます」とか「突然血の繋がらない妹が出来ました」とか自慢してきても、「しかしオレには幼なじみがいるのだよ」の一言で一撃KO出来る。
ただ、双葉は他の娘と少しだけ違っている。
彼女は、生まれつき耳が聞こえない。
いわゆる聾者（ろうしゃ）だ。
だから、双葉との会話は全部手話で行う。
ちなみに、あまり知られていないが、双葉のように先天的に耳が聞こえずしかも両親共に聾者の子どもは、生まれてから最初に話す第一言語が手話になる（こういう子のことをネイティヴ・サイナーと呼ぶ）。
さらに、実は手話と日本語はまるきり別の言語体系を持っていて文法すら違うため、聞こえる人間が後から手話を勉強して会話しようと思っても、そう簡単には行かないものなのである。だから、いくら可愛い娘が多いと教えられても嫁探しにタイやロシアへおいそれと移住できないのと同じよ

うなもので、努力しても完璧なコミュニケーションは難しい。
しかしオレはそう、幼なじみなのだよ。

†

腰に手を当てた双葉が、目を細めて疑わしげに見てくる。
『そんっなに恥ずかしいものばっかりなの？』
『そんっなに恥ずかしいものばっかりだよ』
『エッチな本……とか？』
『……それくらいダイレクトなものの方がまだしも恥ずかしくない』
オレはこうした会話を、全て手話でこなした。自慢ではないが、一応ネイティヴの双葉と遜色のないレベルで話せていると思う。
一言では言えない様々な事情で小さい頃から友達がいなかったオレは、遊ぶのはいつも双葉とだった。物心ついた頃から彼女の家に入り浸り、気づけば周囲の人間が驚くほど手話が出来るようになっていたのだ。
何しろ双葉の家で使われているのは全て手話だ。プチホームステイを繰り返していたようなもので、才能もあったのか、今やバイリンガルくらいの域には達している。
無論多少の努力はしたが、それというのももうとにかく双葉がめちゃくちゃ可愛かったからに他ならない。長い綺麗な黒髪、澄んだ瞳、白磁のごとく白くほんのりふっくらした肌に小振りな唇、何やら表現がイヤらしいがとにかく小さい頃はまるで上品な日本人形のようで、その頃フランス人形のようだと持て囃されていたオレにはないものばかりだった。
その上、幼なじみで美少女で上品で物腰も柔らか、性格もよく、中学になっても毎日のように家に遊びに来るほど関係も良好、しかも最近は身体的成長も目覚ましく、十四歳という年齢のあるべき姿を大きく越えて、夏場など目のやり場に困るほどである。
言語の壁がなんだろう。双葉と会話するためなら古代ギリシア語でもサンスクリット語でもマスターしてみせよう。
『愛くん？』
まあとにかく、以上のような圧倒的優位に甘えて、オレは長年双葉とこ

んなぼやぼやとした関係を続けている。ぼやぼやしているのは当然ながらオレの方で、今のところは大丈夫そうだが、放っておいたらそのうち聾学校でイケメンの彼氏を捕まえてきた双葉を生暖かい笑みと共に送り出す羽目に陥りかねない。

聾うんぬん以前に外見的に深刻なハンデを負っているオレだ。そもそも恋愛対象としてみられているかどうかすら怪しいぐらいである。

『ねえ、愛くん』

『……ふぇ？』

『これは……』

そう言いつつ双葉がいつの間にか手にしていたのは、下着以外の服を着ると力を失うという頭の沸いた設定の魔法少女もの『奇跡のリンジェリエ』の主人公りのっちのフィギュア（Ｖｅｒ．戦闘モード）だった。白目を剥いたオレは間髪を入れずそれを奪取した。

『……忘れたか？』

『え？……あ、うん！　忘れた！　もう何見たか忘れた！』

お兄さんとの約束を思い出してくれたらしい。深々と息を付いたオレは、りのっちを引き出しの奥の奥へ放り込むと、試しにこう訊いてみることにした。

『なあ双葉』

『え、なあに？』

『……オレって、その……男、だよな？』

『時々それ訊くよね。確かめたことないからよく分かんないけど……自信ないの？』

そんなバカな。付くべきものが付いていることは毎日確認済みだ。オレが性別について根本的な勘違いをしている可能性を除けば、オレが男であることに疑いはない。それとも、男性として自信ないって意味だろうか。それはまあ、多少。

いや、オレが訊きたいのはそういうことではなくて。

『だからその、双葉にとって、あの、オレは、男と見なす対象なのかという……』

『愛くんが私にとって？』

すると双葉は意味ありげなイタズラっぽい笑みを口元に浮かべ、そっと言った。
『……男だよ』
そうか。それはよかった。自分でも自信を失いかけてた。
ん、いやちょっと待て。「男」という手話の表現は「彼氏」とほぼ同じ、ちょっと手が動いたかどうかの差しかない。先入観とテンパってるせいで、きちんと見てなかったけど。てか今のかなり微妙だったぞ。
『あのさ、ちょっと双葉今……』
『ふふふ。テレビつけるね』
反則的な曖昧表現に右往左往するオレにくすりと笑った双葉は、何事もなかったかのようにリモコンに手を伸ばした。ああなんてことだ。魔性の笑み。本心はどうなのか訊きたい。でも訊けない。虚しい期待に胸躍らせるオレ。でも、いつもこんな具合に巧いことかわされてる気がする。
一方双葉の方は、頭を抱えてもだえるオレのことなど気にも留めずに、テレビのスイッチを入れた。画面に映ったのは、ニュース番組だった。

†

「今日の午後、全国ＰＴＡ連絡協議会を訪問した勅使河原教育大臣は、報道陣に対し次のように述べました」
アナウンサーのその言葉と共にフラッシュを浴びながら威圧的なＳＰを引き連れて登場したのは、テレビでよく見る黒スーツ姿のスキンヘッドオヤジだった。
真一文字に結んだ口、角縁メガネの奥の眼は完全に据わっていて、見ているだけで不安定になる。教育大臣というよりはむしろ、陸軍最高司令官ないしは大総統閣下とでも呼んだ方が相応しいだろう。
事実この国では、教育大臣は首相に匹敵する権力を持っているというもっぱらの評判なのだ。親子三代でこのポストを引き継ぎ、まだ四十代後半の彼が現在のこの国の教育関係の全てを掌握している。文字通りの独裁者だった。
視線で人を殺しそうなその彼は、処刑を命ずる口調でこう言った。

「一部の連中が児童福祉・教育分の予算をよそへ回せと愚かしいことを喚いているようだがね、ありゃ何も分かっていないとしか言いようがない。子どもたちは国の宝、いわば財産だ。これを守らずして国の安泰な未来はないわけだから。現状でも予算は足りていないくらいなんだ。子どもたちを充分に守るためのシステムを作るには、まだまだ手が甘い」

「一昨年与党によって強行採決され近々施行される改正ＰＣ関連法の中でも、特に児童の交友関係に対する強制執行の部分には、行き過ぎではないかと未だに人権団体などから強い非難の声が上がっていますが」

記者の一人からそんな質問が出ると、大臣はその狂気のこもった眼をそちらへ向けて、鋭く叫んだ。

「君はどこの人間だね、ええ！　ちゃんと子どもはいるのか!?　君はね、若いからね、まだ何にも分かっておらんのだよ。自分の子どもが誰と付き合うか、どうやって生きていくのか、そんなことは大昔から親が自然に導いてやったものだよ。我々はそれを初めて形にして法にしたに過ぎん。何もおかしなことはない。親が子どもを守ってやるためにも、こりゃ至極当然のことだ」

そしてカメラに向き直ると、更にこう熱弁をふるった。

「国民の皆さん！　是非、是非とも教育省（キョーイクショー）の活動にご理解とご協力をお願いします。我々は皆さんの大切なお子様方、その無事な成長をただただ願い、輝かしい将来を守るため働いているに過ぎません。そのためにも今後とも、どうか我々教育省（キョーイクショー）並びに教育委員会（キョーイクイインカイ）の活」

†

オレはチャンネルを変えた。双葉は不思議そうな顔で尋ねてくる。

『え、どしたの？　あれどんな話だった？』

『つまんない話。ただそれだけ』

『ふうん……』

自分の正義を熱弁するヤツというのはどこを向いても存在する。それを非難するつもりはさらさらない。好きにすればいいだろう。むしろ彼らに問題があるとすれば、こちらの意見を聞き入れようとしない、というとこ

ろなのだ。
　その後、オレは双葉にさっきの商店街での不良との死闘を（若干娯楽性を高めつつ）話してやった。双葉は深く感心した面持ちで聞いている。
『うあーすごいね。愛くんやっぱりモテるんだね』
『何を聞いてたんだよ。釘バット振り回して深夜の国道駆け抜けてそうな奴が、物欲しげにこっそりオレの方窺ってるんだぞ。どれだけ恐ろしいか』
『あー、でも中身はいい人かも知れないし』
　しかし経験上そうした梱包ミスは少ないことをオレはよく知っている。
『それに、愛くんだって外見と中身が一致してないし』
　そうだねホントありがとう。最近結構辛辣だよね。
『ほら、うちのお父さんずっと勘違いしてたじゃない？』
『オレが小六になるまで女子だと思いこんでたって聞かされたときはさすがに絶望したけど』
『未だに疑ってるみたいだよ。もっと分かりやすくしたら？　ほら、服とか髪とか。その不良さんみたいにしたらどうかな』
『これ以上痛々しくしてどうすんだよ』
『吹っ切れるかも知れないよ』
　このように、オレと双葉の会話は果てしなく続く。実のところ、双葉はかなりおしゃべりな子なのだ。オレの知っている他のどの女子よりもずっと表情豊かでカワイイし、どんな話題でもおざなりに片付けるようなことは絶対しない。人をイジるだけイジってあっさり捨てるクラスの無情な女たちとは大違いだ。
　何より、眼が違っている。ほんのわずかな手の動きや表情の変化が文法になる手話を完全に聞き取るため、聾者は一種独特の眼差しをするのだ。こう、相手の全てを捉えるというか、存在そのものを受け入れるというか……説明は難しいが、そういう眼だ。双葉の眼はどこまでも純真で、優しい。オレを理不尽な嫉妬の籠もった冷たい眼で見てくるクラスの傲慢な女どもとは、天と地ほどの差がある。
　そんな何もかもから考えても双葉以外なんて正直考えられない。でも、双葉に振られたらオレにはもう確実に後がない。十四歳にして背水の陣を敷いての告白なんてあんまりだ。そんなわけで、オレは未だにもう一歩先

へ踏み出せずにいるのである。
だけど、これだけいつも一緒にいるんだしな、双葉の方だってきっと……
『ねえ、愛くん……』
そうしてオレがニヤつきながら思春期丸出しの妄想に耽っていると、いつの間にか双葉は横からいなくなっていた。見ると、オレの戦利品が入った袋をゆっくりと開くところだった。イタズラっぽく微笑んでいる。
『このＣＤはどういうの？』
『うぉおい！』
再び飛びかかったオレは、双葉の手から夢の詰まったヴィニル袋を奪回しようとする。しかし残念なことにオレの体格は双葉と大して変わりないので、組み合ったら力もどっこいどっこいなのだ。
『ねえ何なの？　見せてよー！』
言いながら可笑しそうに笑う双葉は、半ばオレにしがみつくようにして袋の中の声優（おたから）Ｃｄに手を伸ばしてくる。双葉の全体的に柔らかい身体の特に大きくて柔らかいところがぴったりとくっついてきて、ソレがむにゅむにゅとまたとってもあったかくて、オレはもう動くに動けない。揺れるその長い黒髪からは、心地好い香りが流れてくる。もう！
『ちょっと、双葉、その、ええと、あの、む、胸が……』
『イヤ？　暑い？』
『イヤとか暑いとかそういう問題じゃなくて、その……』
『最近ね、またおっきくなってきたの。けっこう重いんだよ。夏とか谷間が暑いし、すぐブラがきつくなっちゃうから大変で……ねえ愛くん、聞いてる？』
そう、昔からずっとこんなだ。最後には必ずこうなる。この歳になっても全っ然恥ずかしがりもせず、平気でぺたぺたスキンシップしてくるのだ。しかも楽しくなってしまうと、オレの部屋の中だけじゃなく、屋外でもどこでもおんなじ調子で抱き付いてくる。オレにどうしろっていうんだ。それればかりかこうやって、女の子同士でしかしないような恥ずかしい話まで、気兼ねせずにしてくる。
というかその、「恥ずかしがるべき話なのだ」という意識自体、まるで

ないようなのだ。普通の話題として、純粋な顔して素朴な素振りで清純な雰囲気を保ったまま真正面からオレの眼を見て話しかけてくるもんだから、オレとしてはパニックに陥るよりほかない。

正直、『この間買った下着がカワイイんだよ』とか、『最近胸もおしりも窮屈でどうしよう』とか、こないだの夏なんかオレの部屋でいきなり脱ぎだして『この水着どう？』とか楽しく話しかけられると、見た目はともあれ中身は思い切り思春期青少年のオレとしては、最早お喋りどころじゃないんだよ。

しかし、喜んでばかりもいられない。オレが何を思っていようと外見上は、女の子二人がお喋りしてふざけあっているようにしか見えないのだ。体格的にもオレは抱きしめやすいだろうし。つまり。

要は双葉もオレのこと、女友達だと思ってるんじゃないか……？

『どしたの愛くん？　あ、よーしやった、取れた！　えーっと、『奇跡という紋章』……？　あ、これ、さっきのお人形の女の子のアニメの歌？』

素直に感触を楽しめないまま、今日もオレはオモチャにされているのだった。

3.

こうしてオレたちはいつも通り喋って遊んで、それから双葉は九時半頃に帰っていった。家もすぐそこだから心配ないし、それにこの世の中、子どもを狙って犯罪を犯す阿呆なんか滅多にいない。被害者が子どもだというだけで量刑が格段にアップするのである。以前女子高生ばかりを狙った痴漢魔なんか、確か懲役十五年の実刑判決を喰らっていた。

『また明日ねー』

そう元気に笑うと、ご機嫌さんの双葉は道の向こうへ歩いていった。オレはまだ手やら全身やらに残る感触にふわふわしながら、その後ろ姿を見送った。

その後、オレは遅い夕飯を食べる。母親は不満たらたらだったが、しかし実はこれは予定通りなのだ。今日は遅くまで起きていなければならないから、あまり食べるのが早すぎると後々腹が保たない。

日曜深夜二十六時三十分からは、オレのただいまお気に入りのアニメ「零（ゼロ）の巫女（みこ）（通称ゼロミコ）」の時間なのだ。

大元の原作は例によって十八禁ゲーム、内容はまあ、タイトル通りかわいい巫女さんが売りなのだが、これがなかなかに……病んでいる。

御幣の代わりに鉈を持ったパッケージが印象深い民俗学調サイコホラー風味の本格ミステリー作品で、シナリオも見応えがありキャラデザインもグッド、作画も時間帯にしては及第点でしかも主演は贔屓の声優となると、これは観ないわけにはいかない。基本的には怖がりのオレだが、夜中に枕を抱きかかえてびくびくしながら毎週鑑賞しているのである。

ただ……これを見てはっきり感じたのは、病んでる美少女は二次元だけでたくさんだということだ。こんな娘（こ）いくらかわいくたって、現実にいたらやっていられない。先週も、主人公の男友達が鉈で景気よく首を刈られたシーンで終わって暗澹たる気分になった。

そうして放送が終わってからちょっとネットに感想を書き込んだりしているとたちまち午前三時を過ぎ、翌朝は八時頃母親に叩き起こされて、無理矢理学校へ行く羽目になる。しかしこれもいつものこと、この程度の楽しみがないとホント毎日やってられない。

明日は月曜日、ＰＣ法に支配された憂鬱な学校が、また今週も始まるのだ。